

**2012年度 日本スポーツ社会学会  
第2回「定例研究会・学生会員プレフォーラム」開催報告**

日本スポーツ社会学会研究委員会では、研究活性化の一環として、去る2012年12月8日に第2回定例研究会、学生会員プレフォーラムを実施しました。以下、研究会の内容についてご報告いたします。

日時：2012年12月8日（土）13:30-18:00

場所：立命館大学学而館第2研究会室

1. 定例研究会 テーマ：「政治とスポーツ」 15:10-17:10  
報告者：松島剛史氏（立命館大学）、杉本厚夫氏（関西大学）  
司会：市井吉興氏（立命館大学）
  
2. 2012年度学会大会シンポジウム（「政治とスポーツ」）に向けた検討会 17:20-18:00  
報告者：金子史弥氏（一橋大学）  
司会：石坂友司（関東学園大学）
  
3. 第2回関西学生会員プレフォーラム 13:30-15:00  
報告者：塩見俊一氏（立命館大学研究生）、久保ちさ代氏（立命館大学大学院）  
司会：松島剛史氏  
世話人：松島剛史氏、石原豊一氏（立命館大学）、浜田雄介氏（広島市立大学）

1. 第2回定例研究会 テーマ「政治とスポーツ」

○司会：市井吉興氏（立命館大学）

①松島剛史氏（立命館大学）

：「ラグビー新興国へ向けた国際ラグビーボードの発達戦略

——1990年代後半の公認レフリー制度の導入に着目して」

松島氏は、イングランドで発祥し、グローバルな広がりを見せているラグビーに注目し、国際ラグビーボードに権限をもつ創設ユニオンと呼ばれる8カ国と、その意志決定過程に容易に参加できない新興国との関係を描き出した。近年特にラグビー新興国の競技水準を向上させたとされる国際ラグビーボードによる「公認レフリー制度」の分析では、ボードによって「正常」とされるレフリーングが新興国に受容される過程を通して、結果として「均

質的なゲーム」というグローバルな秩序の生成と共有が創設ユニオンと新興国ユニオンの間に形作られ、グローバルスポーツとしてのラグビーの市場化を推し進めていくという仮説が示された。

#### ○フロアとのディスカッション

松島氏の報告に対しては、例えばサッカーがルールを共有化を果たしながらグローバル化していった一方で、発祥国と言われるイングランドがしばらく加わっていなかったように、グローバル化の様態も競技によってさまざまであるはずで、オリンピックや FIFA・W杯などと比較して、ラグビーはどのような発展をとげ、マーケット拡大戦略を展開しているのかと言った質問がなされた。また、創設ユニオンを中心とする国際ボードが「公認レフリング制度」を通して新興国の競技水準をコントロールし、ボードに取り込もうとする力に対して、どのような反発やせめぎ合いが行われているのか、そのときスポーツにおける権力の主体（覇権争い）をどうとらえるのか、レフリング制度の導入がどれほど効果的に作用するのかといった質問がなされた。そのことに関連して、国際ボードが押しつけてくる「スポーツの正統性」に関して、ルールにおける軋轢をみることでどのような発見があるのか、それらの正当性を担保するもの、すなわち権力（＝政治性）の問題をどのように考えるのかといった視点が出され議論が行われた。

#### ②杉本厚夫氏（関西大学）

：「成熟時代の市民スポーツ——大阪マラソンを出かかりとして」

杉本氏は大阪マラソンの運営に携わった経験と調査研究から、市民マラソンの隆盛とこれまでのいわゆる近代マラソンとは大きく異なる特徴について報告した。3万人の参加者（ランナー）と1万人のボランティアを対象としたアンケート調査から、大阪マラソンを読み解くキーワードとして、挑戦／ツーリズム／スポーツ空間／支える／観る、の5つの視点を提示して分析した。例えば、ランナーは競争から共創（仲間との一体感）、都市空間を身体で認識する記録から記憶への転換、非日常性＝都市の発見を果たしながら、これまでの近代マラソンが前提としていた競争、記録に依存する価値観を覆しつつある。そこにはあくまでも純粋に（競技としての）マラソンを実施したい運営側とボランティア、選手との葛藤が生まれていることが示された。

#### ○フロアとのディスカッション

杉本氏の報告に対しては以下の質問がなされた。記録や近代スポーツとしてのマラソン、教育としてのスポーツを維持したい運営側に対して、市民が主体的にスポーツを選べる局面の登場は喜ぶべき現象に見えて、これまで「政治とスポーツ」のテーマで議論されてきたように、実は巧妙な市民の新しい操作手法ではないかという見方も考えられる。現在は行政が関与しない市民主体のマラソンに見えて、広告塔として期待されている東京マラソ

ンのようにどこかで大阪都構想への利用がなされないとも限らない。このように成熟社会のマラソンは誰にでも使える都合の良いマラソンに転化する可能性を有している。そこを注意深く見ていく必要があるのではないか。また、長野マラソンをはじめ、各地域でマラソンブームが起こっているが、そこで必ずと言って良いほど強調されるランナーとボランティアの一体感、マラソンのすばらしさがあるが、大阪では他のマラソンと違う特徴が見られるのか、と言った質問がなされ、杉本氏の事例報告を交えた説明を受けて議論を行った。

## 2. 2012年度学会大会シンポジウム（「政治とスポーツ」）に向けた検討会

○司会：石坂友司（関東学園大学）

2012年度学会大会シンポジウムは「政治とスポーツ」・「スポーツと教育」の2テーマで実施されるが、「政治とスポーツ」のシンポジウムについて、企画案の提示と論点の説明を研究委員会から行った。テーマは「ロンドン・オリンピックをめぐるポリティクスを考える」とした。昨年度の定例研究会からの連続性を踏まえて、金子史弥氏に登壇をお願いし、イギリスのスポーツ政策を踏まえたロンドン・オリンピックの開催について、メガ・スポーツイベントの開催と都市の（再）開発をめぐる問題、オリンピックの力学とロンドン大会開催の意味、改変された都市とそこに住まう人びとの生活の変化（階級・階層論の現在）などの論点を提示した。

○報告：金子史弥氏（一橋大学）

：「2012年ロンドンオリンピックとイギリスのスポーツ政策  
——地域スポーツ振興の「国家戦略」化に注目して」

金子氏は、「オリンピックとエリートスポーツ政策」、「オリンピックと都市の（再）開発」というテーマを重視しつつも、新たに「オリンピックと地域スポーツの振興」という視点を導入して報告を行った。オリンピックの招致に向けて、「スポーツの振興」が目的の一つとして掲げられ、オリンピックの「レガシー」と結びつけられていることを指摘し、地域スポーツに対する予算の増加がその具体的事例となりうるのか、または背後に存在する政治的意図について、文化・メディア・スポーツ省及び非省庁公的機関であるスポーツイングランドの政策文書などをもとに、シンポジウム報告に向けた概要説明を行った。

○フロアとのディスカッション

報告を受け、フロアからはテーマを絞り込んでいく必要性や具体的な事例報告からシンポを構成していく必要性などについてアイデアが寄せられた。

以上  
（文責・石坂）



### 3. 第2回関西学生会員プレフォーラム

○司会：松島剛史氏（立命館大学）

①塩見俊一氏（立命館大学研究生）

：「戦後初期日本におけるプロレスの生成過程——柔道の同時代的展開を中心に」

本報告は、戦時期と敗戦、占領と独立という激動の時代にスポットをあて、しばしば力道山というスター選手の活躍によってその生成が語られがちであったプロレスの誕生を、一見すると大衆娯楽とは無縁であるかのような柔道の同時代的展開との関わりから問うたものであった。武道が国家との結びつきを強めていく時期にあつて、興行色の濃いプロ柔道がストリップのような大衆娯楽と節合しながらプロレスの生成を支えたプロセスからは、反米ナショナリズムや敗戦コンプレックスといった言葉だけでは語り尽くせない大衆の生活形式の一端が示唆された。フロアからは、この事例は戦後スポーツのプロ化やアマチュアスポーツ一般の動向など、より広い文脈から捉え直してはどうかなどの意見が寄せられた。

②久保ちさ代（立命館大学大学院）

：「引退したJリーガーの進路状況——セカンドキャリア支援の検討に向けて」

本報告は、プロスポーツ選手のセカンドキャリア支援に関する論文の作成に向けて、Jリーグクラブに在籍した選手のセカンドキャリアの諸傾向をデータ解析を通じて明らかにするというものであった。尚、データは1996–2012年にセレッソ大阪、京都サンガに在籍した選手のうち、2012年7月までに引退した選手を対象に集計された。結果として、被験者の6割がスポーツ関連職に残っていることから、非スポーツ関連職（一般労働者市場）への参入を目的とした現行のキャリア教育に加えて、クラブ職員や指導者などスポーツ界に残る者を想定した支援策を検討していく必要性が示された。フロアからは、データ解析の方法や変数の妥当性に加え、一見するとスポーツ関連職に就くという「当たり前」の現象がどのような社会的文脈から生み出されているのかなどの質問が出された。

以上の活発な議論を終えた後、近畿、中国、東海、九州地区の学生会員の規模や動向を把握し、より多くの皆さんに登壇してもらおうべく積極的に活動するという方針が示され、閉会した。

以上

（文責：松島剛史）

